

米第8空軍最初のミッション

栗人@ケータイ

古い雑誌ですが「AIRCOMBAT」誌 1984 年春号「AAF BOMBERS AT WAR Europa 1942-45」に、米第8空軍最初のミッション(1942年7月4日)のいきさつをまとめた記事があり、思うところあって抄訳してみました。政治家の失策の尻ぬぐいをする現場の兵士、という構図はどこでも同じであります。また航空機の装備品の使い方も垣間見えるところがあり、興味をそそられた、という訳であります。

1. 1942 年 5 月

1942 年前半、連合軍はヨーロッパ大陸から追い出され、ロシア、地中海、太平洋いずれの戦域でも芳しくない戦況が続いていました。アメリカも参戦して半年経ちましたが、まだヨーロッパで作戦行動を起こす様子がありません。

このころからイギリスはアメリカに対して「レンドリースでの物資供給はありがたいが、戦争に勝つためにはアメリカの戦闘力が必要だ」とやんわりとではあります。苦情を言い始めます。「モノ、カネだけではなく汗、血を流せ」ということでもあります。その 50 年後に極東の某国が言われたのと同じようなことを、アメリカも言われていたのであります。アメリカ側でもこれを受けて統合参謀本部では「何か行動を起こさねば」という雰囲気が出始めます。

そんな折の 5 月末、在英アメリカ大使の J. ワイナント氏が事態を悪化させてしまいました。7 月 4 日にロンドンで開催予定のアメリカ独立記念日パーティへの招待状を英国社交界、政界著名人達に数百と送ってしまったのであります。当時、イギリスの人々は戦時統制経済下で耐乏生活を忍んでいた訳なのですが、そこに「戦争努力を示さないアメリカ」が「イギリスからの独立を記念する」ために「贅沢な」パーティをやりますよ、とやってしまったのであります。まあ、イギリス人の神経逆なですること甚だしく、好意をもって受け入れられるはずがありません。ワイナント大使、外交上の失策をやってしまいました。

2. 1942 年 6 月

同年 6 月にアイゼンハワー少将が欧州派遣アメリカ軍の総司令官としてロンドンに着任しますが、着任早々、この政治問題に対応することになります。アイゼンハワーにとっては「とんだ迷惑」でしょう。本業の軍事作戦で「何か行動」しようにも肝心のアメリカ軍部隊のイギリスへの移動はスローテンポで訓練もままならず、特殊部隊でゲリラ的な襲撃を行うにもまだ何ヶ月もかかりそうな状況です。そんな状況下、アイゼンハワーとしては、航空戦力に頼るしかありませんでした。

その航空戦力も、当時アイゼンハワーの手元で使えるのは A-20 ハボック装備の第 15 爆撃中隊のみ。しかもこの部隊も機材が本国から未到着のためイギリス空軍のポストン(レンドリースでイギリスに供与された A-20)を借用せねばなりませんでした。

早速アメリカ／イギリス両国のスタッフ間で行動計画の協議が始まりました。アメリカ側は、フランス北部の港湾を中高度、高速で昼間爆撃する攻撃案を提示しますがイギリス側はこの案を一蹴します。ドイツ軍の防空能力を甘く見過ぎている、中高度の昼間爆撃は成功確率も生存確率もあまりにも低い、アメリカの宣伝目的のために自分たちの飛行機を貸せるか、というわけです。おまけにこの時期、フランスの港にはドイツ軍の目立った艦船は既になくなっていました。(1941 年のチャンネルダッシュでドイツ軍の大型艦船はフランスから撤退済みでした)

どこをどうやって叩くかは決まらないまま時が経ち、アイゼンハワーには官民からの圧力が日増しに強くなっていきます。この事態を打開するには何か「戦う意志」をアピールしなくてはなりません。

一方、そんな状況をよそに、ロンドンでの独立記念日パーティの準備は着々と進んでいきます。酒やタバコなどの大量の嗜好品が集められ、イギリス人達が何ヶ月も目にする事ができなかった食材を使った料理メニューが用意されました。おまけにダンスミュージックで雰囲気を盛り上げるためにアメリカ陸軍所属のオーケストラまで手配されました。このままで「戦う意志」のアピールが無ければイギリス側の反感は避けられそうにありません。

アイゼンハワーの空軍スタッフで第8空軍のトップであるスパーツ少将とイーカー少将までイギリス側との協議に加わり、「攻撃計画の立案を早急に進める」との合意をようやくとりつけました。攻撃の日取りは未定のままですが、事態は少し好転です。

7月が近づくと連合軍側のマスコミは大陸反攻はまだかと声を挙げ始め、ドイツ側はアメリカ軍を嘲る宣伝放送を繰り返し流し続けます。

3. 1942年7月1日～3日

7月になってしまいました。7月2日、ロシア戦線ではドイツ軍がクリミア半島の要衝セバストポリを陥落させコーカサス地方侵攻の道を開き、北アフリカ戦線ではロンメルのアフリカ軍団がスエズまで70マイルに迫っていました。連合軍にとって苦しい戦況が続いています。

もう時間切れです。この日、アメリカ軍最初の航空作戦を7月4日に行うことが決まりました。アメリカ大使と2600人の招待客が銘酒、美食、ダンスを楽しんでいる同日に、「アメリカも戦っている」証しを立てるためにアメリカ陸軍航空隊員飛ぶことになりました。

作戦計画についてイギリス側は「戦闘未経験のアメリカ軍パイロット達に一個飛行隊分の機材を丸ごと貸すことはできない」として、アメリカ側は妥協を強いられます。

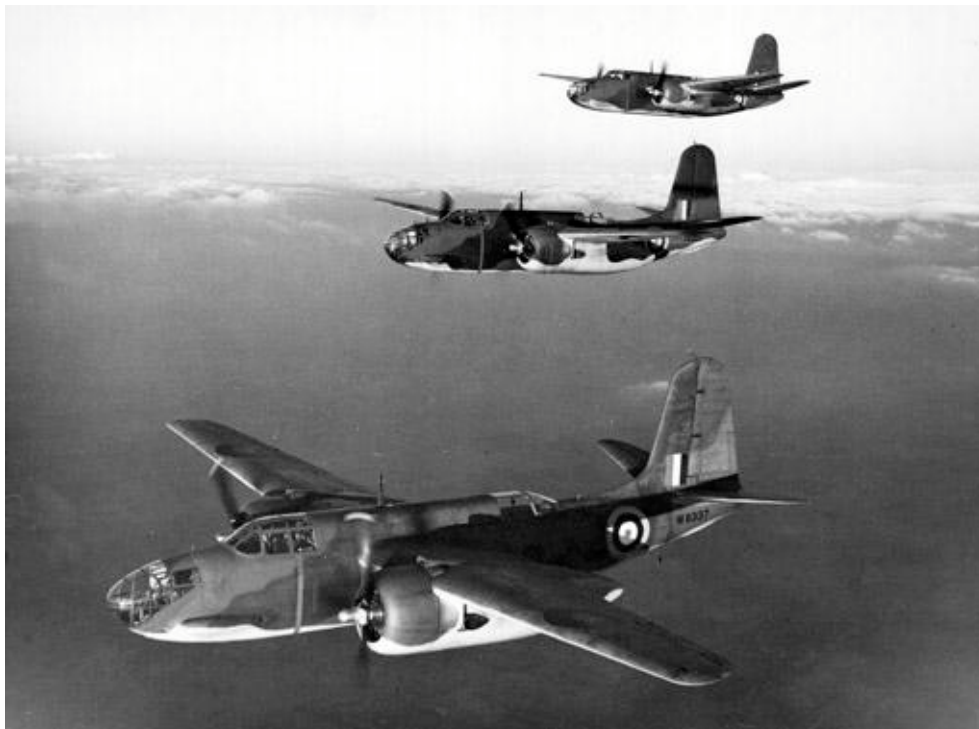
- ・攻撃には英軍のポストン12機のみを使用。戦闘機の護衛は無し。

- ・ポストン12機のうちアメリカ軍が使用するのは6機だけ。

他の6機はイギリス軍メンバーが搭乗、アメリカ軍機に随伴し誘導する。

- ・機体の国籍標識は全て英軍ラウンデルのままとする。

加えて、アメリカ側の飛行計画も却下されました。イギリス軍戦闘機の護衛はつかないので中高度の昼間爆撃は自殺行為。そこで、12機はドイツ軍占領下のオランダ沿岸部にあるいくつかの目標を低空で奇襲攻撃する方法に切り替えられました。ただちに命令書が作成されます。



イギリス空軍のポストンIII(ネット上のオープンソースより)

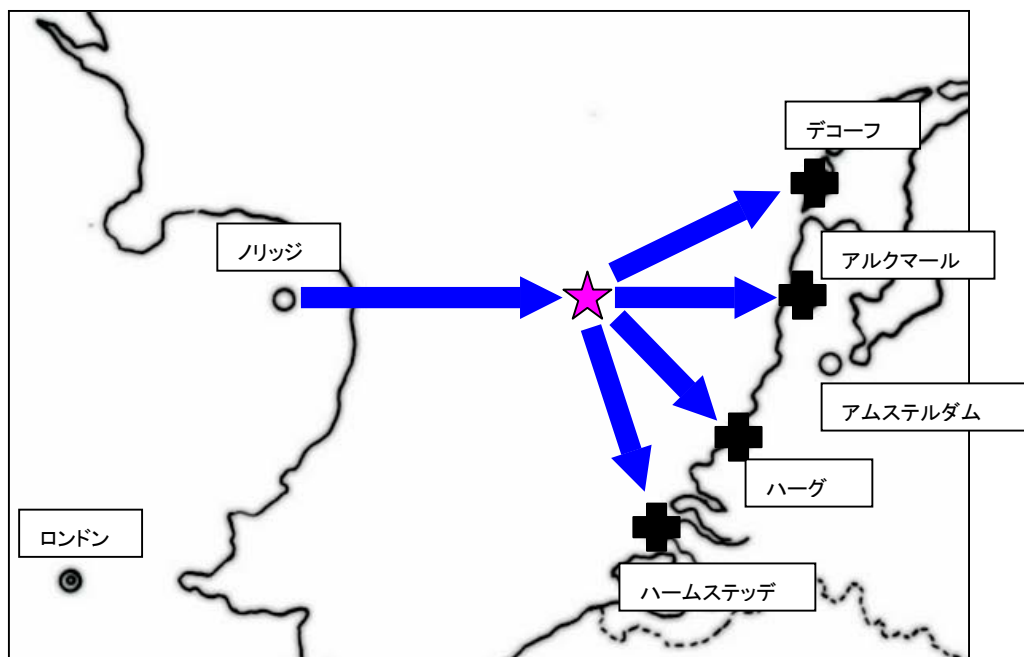
7月2日の夜遅く、イングランドの南東端、ノリッジ近郊のイギリス空軍第226スコードロンの基地に分厚い命令書が届けられます。

7月3日の午後、226スコードロンのブリーフィングルームにアメリカ軍の出撃予定メンバーが集められ、そこに「気をつけ！」の号令がかかりアイゼンハワー、スパーツ、イーカーの各将軍が入ってきました。スパーツ、イーカーの2人は終始むっつり不機嫌、アイゼンハワーは笑みを浮かべていましたが顔は引きつり疲れた表情でした。アイゼンハワーは出撃予定メンバー全員と言葉を交わし、皆がとても若いことに驚いていた様子でした。無理ありません。出撃予定者の最年長は25才の大尉で、十代の少尉もあり、全員、6ヶ月前に飛行訓練を終えたばかりでありました。

将軍達が帰った後、イギリス軍メンバーも加わって作戦のブリーフィングが始まりました。「攻撃目標は、オランダ沿岸のデコーフ、アルクマール、ハーグ、ハームステッデの各敵戦闘機飛行場。」
「発進後、全機まとまって進撃。イギリスの海岸線を越えたらすぐに低空に降りろ。北海上の散開ポイントで3機ずつの4フライトに分かれて各目標に進め。」
「目標では場内の航空機、各施設を爆撃、機銃掃射せよ。各フライトの攻撃が相互に牽制攻撃となるだろう。」
「攻撃終了後は各々、まっすぐ基地に帰投せよ。」
「目標付近の天候は薄いもやがかかっているだけで視界は充分との予報だ。さらに往路、復路とも低層の雲のカバーが期待できる。」
「無線の発信は全行程で使用禁止。位置標定の要求も、味方圏内に近いと思う場合に限る。」・・・

4. 1942年7月4日

開けて7月4日の夜明け、12機のクルーは、朝食に新鮮な卵、ベーコン、トーストにマーメレード、コーヒーという出撃メンバー向けの特別食を食べて出撃します。ノリッジを離陸後、編隊を組み東に向かい、イギリス本土の海岸線を越えた後、高度50フィートに下げて220mphで北海上空を進撃します。途中、北海上空で期待していた雲が消えてしまい、攻撃は快晴の下で行われることになりました。しばらくして散開ポイントに到達し、ここで4フライトに分かれて各目標に向かいます。各フライトは各々の目標に3分間と空けずほぼ同時に、ドイツ軍側が応戦体勢を整える直前に到達しました。



攻撃計画

(1) デコーフ攻撃隊

| 機長 | 所属 |
|---------|----|
| ケネディ少佐 | ◎ |
| ケゲルマン大尉 | ☆ |
| ローエル少尉 | ☆ |

所属は、
☆:アメリカ軍
◎:イギリス軍

ケネディ少佐は目標の3マイル手前で一旦高度を 500ft に上げて目標を確認、ハンガーに目標を定めて突入します。激しい対空砲火の中、4発の 500 ポンド爆弾を投下。即座に機体を地上スレスレに高度を下げて待避に移ります。

ケネディ少佐が振り返った時、続くケゲルマン大尉機の左エンジンからプロペラがはじけ飛ぶのを目にします。高射砲弾がケゲルマン大尉機の左プロペラを直撃、不発でしたがペラブレードとハブを丸ごともぎ取ってしまったのです。ケゲルマン大尉は地上スレスレで必死に操作するものの、機は推力を失った側の翼を傾け翼端が地面に接触。翼端がちぎれ飛びましたがその反動で機体が浮き上がり姿勢を回復、そのまま待避行動に移りました。

直後、ケネディ少佐機の後尾銃手が叫びます。

「アメリカ人がやられた！」

ローエル少尉機が撃墜され、オレンジ色の火の玉と黒煙が上がりました。

(2) アルクマール攻撃隊

| 機長 | 所属 |
|---------|----|
| ビクスビー中尉 | ◎ |
| ヘンショウ少尉 | ◎ |
| リン少尉 | ☆ |

激しい地上砲火の中、ビクスビー中尉は編隊を散開させて個別に攻撃に向かいます。直後、リン少尉機がピッチアップして地面に激突。閃光と煙を残して姿を消してしまいました。

ヘンショウ少尉機は爆撃コースから向きを変え、離陸中の Fw190 の背後に迫り機首の 7.7mm 機銃 4 丁で襲いかかります。Fw190 は撃墜され地面に激突、炎上。

自身の目標を爆撃したビクスビー中尉が旋回すると、Fw190 を撃墜したヘンショウ少尉機が目に入りました。しかしその後ろに Fw190 の 2 番機が迫るのを見てビクスビー少尉は無線で叫びます。

「ヘンショウ！ 後ろに敵機」

ヘンショウ少尉機は爆弾を捨て回避行動をとりますが、Fw190 の射撃を受けて火を吹き、海に墜落。上昇旋回する Fw190 の下をビクスビー少尉は海面スレスレですり抜けて帰路につきました。

(3) ハーグ攻撃隊

| 機長 | 所属 |
|----------|----|
| キャッスル少佐 | ◎ |
| クラウトリー大尉 | ☆ |
| ハウエル中尉 | ☆ |

ハーグではドイツ軍の応戦体勢が遅れた所に 3 機のボストンがフルスロットルで突入します。

クラウトリー大尉とハウエル中尉は爆弾倉扉の開閉レバーを掴み、コックピットの中で身を屈めてキャッスル少佐機が爆弾倉扉を開けるのを待ちます。しかしキャッスル少佐機の爆弾倉扉は開かず、3 機は銃爆撃することなく、飛行場を飛び抜けてしまいました。

爆弾倉扉の開閉レバーには「閉」「中立」「開」の3ポジションあり、通常は味方領空を出ると「閉」→「中立」として敵地上空では1アクションで「開」にできるようにしておくのですが、この時キャッスル少佐機では「なぜか「中立」になっていなかった」のです。キャッスル少佐が「あれ？」と思った時には既に遅く、しかし応戦体勢を整えた敵飛行場に再突入するのは危険が大きすぎます。困惑する 2 機のアメリカ機を従えて、キャッスル少佐はそのまま帰路につきました。

(4) ハームステッデ攻撃隊

| 機長 | 所属 |
|----------|----|
| ワディントン大尉 | ◎ |
| エルキンス少尉 | ◎ |
| オーデル大尉 | ☆ |

3 機は散開して爆弾倉扉を開けて各個に目標に向かいます。飛行場に差し掛かろうとする頃に対空砲火が始まりました。

エルキンス少尉機はコクピット計器板に被弾、計器が狂い始めましたがそのまま突入し整備格納庫を爆撃、脇に並んだ He111 を機銃掃射します。

ワディントン大尉機は燃料集積場と司令部ビルを爆撃。

オーデル大尉機は兵舎と高射砲陣地にパラシュート付き対人爆弾を投下。20mm 機関砲弾 1 発を被弾しますが致命傷にはならず、3 機は地上スレスレに降りて待避に移ります。

5. 帰投、その後

ハリッジ近郊の基地で待ちわびる人々の前に、ぼつりぼつりとボストンが帰ってきます。上空を通る時に赤い信号弾を放つボストンが着陸する度に、救急車と消防隊がそちらに向かいます。最後に帰ってきたのはエルキンス少尉で、油圧システムに被弾してブレーキが使えず飛行場一杯を使ってやっと静止できました。

攻撃の結果をまとめると、次のような結果になりました。

| 攻撃目標 | 機長 | 所属 | 爆撃した? | 生還した? |
|---------|----------|----|-------|-------|
| デコーフ | ケネディ少佐 | ◎ | ○ | ○ |
| | ケゲルマン大尉 | ☆ | × | ○ |
| | ローエル少尉 | ☆ | × | × |
| アルクマール | ビクスビー中尉 | ◎ | ○ | ○ |
| | ヘンショウ少尉 | ◎ | × | × |
| | リン少尉 | ☆ | × | × |
| ハーグ | キャッスル少佐 | ◎ | × | ○ |
| | クラウトリー大尉 | ☆ | × | ○ |
| | ホウウエル中尉 | ☆ | × | ○ |
| ハームステッデ | ワディントン大尉 | ◎ | ○ | ○ |
| | エルキンス少尉 | ◎ | ○ | ○ |
| | オーデル大尉 | ☆ | ○ | ○ |

アメリカ軍メンバーで見ると、爆撃成功率は 1/6(約 17%)。生還率は 4/6(約 67%)。帰ってきた機体も 6機は対空砲火の被弾で少なくとも 1 週間以上の修理が必要、という結果です。お世辞にも「上首尾」とは言い難い内容でした。

ロンドンでの独立記念日パーティの最中、アイゼンハワー付き海軍武官のブッチャー大佐がパーティ会場の脇部屋に呼ばれ、ボルト将軍から上記の結果が電話で伝えられました。ブッチャー大佐はこの結果をアイゼンハワー将軍に伝えるのに「気が引けた」そうで、実際にどのようにアイゼンハワーに、そしてパーティ会場に伝えられたか、記事は黙しています。

大戦中、その後何度も作戦行動に政治圧力が加わることがありましたが、アイゼンハワー将軍は、「アメリカの名誉のため」とかプロパガンダ目的のための作戦行動を二度と許可しなかった、ということです。

おわり